

氏名(本籍) **阿部軍治(茨城県)**

学位の種類 博士(文学)

学位記番号 博乙第1,482号

学位授与年月日 平成11年3月25日

学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 ソ連邦崩壊と文学
—ロシア文学の興隆と低迷—

主査 筑波大学教授 博士(文学) 荒木正純

副査 筑波大学教授 井上修一

副査 筑波大学教授 池内輝雄

副査 筑波大学教授 森田孟

副査 筑波大学助教授 博士(文学) 三谷恵子

論文の内容の要旨

1985年のペレストロイカ以降、旧超大国ソ連邦ならびにロシアに大変動が起こり、ソ連邦は解体し体制の転換が起こった。それとともに、ソビエト・ロシア文学も大きな変化を経験した。本論文は、ペレストロイカからソ連崩壊期に、ソビエト・ロシアの文学界と文学がいかに変貌したかをめぐり、10年以上にわたる観察と膨大な資料を基に考察を加え、その過程と変容そのものを解明・論証しようとしたものである。構成は以下の通り。

まえがき

序論

序章 ソ連邦崩壊と文学環境の変化

第1章 ロシア文学界における闘争

第2章 ソ連作家同盟の分裂と解体化

第3章 出版界と文学を取り巻く環境の変化

第4章 ペレストロイカとロシア文学界

第5章 「新しい波」の作家たち

第6章 ジャンルと作家層の多様化—社会主義リアリズムを越えて、ロシア文学の広がり—

第7章 現代ロシア文学の新しい諸傾向

結章 精神的混迷とロシア文学の危機—本書全体のまとめとして—

あとがき

参考文献

索引

序論は、本論文の課題と目的、さらに先行研究および使用した資料と方法について説明を行っている。

序章は、ペレストロイカとソ連邦崩壊により、文学を取り巻く政治的・社会的、また経済的諸条件等が一変したが、そのため文学的営為が極めて困難になり、文学者たちやインテリゲンチアは困窮化したこと、さらにその国家的変動が文学的環境を変え、文学界の大変化の諸前提を生みだし、ソビエト文学の終焉がもたらされたことなどが明らかにされている。

第1章では、政界および社会の変化に対応し、文学界の共産党系支配グループの勢力が後退し、それとともに

勢力関係が一変したこと、そして改革派左派と改革に反対する守旧・保守派右派との間に「内戦」と呼ばれた激しい闘争が展開されたが、その文学的闘争の思想面が主として考察され、錯綜した闘争状況と保守派の変容過程等が解明されている。

第2章では、旧ソ連の全ての文学者たちを物心両面にわたり支配していたソ連作家同盟内部において、いかなる闘争が展開され、それがいかなる変遷を経て弱体化・崩壊して行ったかが詳細に考察・解明されている。

第3章では、社会主義リアリズム時代に国家保護を受け安定した経営をつづけていた出版界が、ペレストロイカによって新聞雑誌等の一時的繁栄はみるものの、市場経済が導入されるや市場化の波にさらされ、一転してのきなみ部数を激減させ破局的な状況に追い込まれたこと、そして読書界では翻訳文学や推理小説等の大衆文学が氾濫し、伝統的な自国文学は退けられ、また質的变化をきたすことになったことなどをめぐり、出版界・読者層・図書館等の種々の統計資料等に基づく詳細な検討が行われている。

第4章では、ペレストロイカ以降の約10年間に起こったロシア文学の新しい状況全般、つまりソビエト文学の時代に禁圧されていた優れた作品が大量に発表され文学界が大きく様変わりしたことが論証され、そのうえでその中の代表的な作品をめぐり具体的な検討が行われている。この期間、半世紀以上にもわたりソ連文学界に君臨していた創作原理の社会主義リアリズムが瓦解し、非社会主義リアリズム系の禁制作品が一挙公表されたが、それによってロシア文学が従来のソビエト文学から内容の面でいかに変容することになったか、そしてその差異はいかに質的に異なるものであったかが解明されている。

第5章では、いわば第3のグループに属し、この時期に文壇で特に活躍し、ロシア文学の内容の変化を印象づけた「新しい波」の作家たちと呼ばれた新進の作家たちが吟味・考察の対象となり、その主要作品等が分析されている。たとえば実存主義的な作品や、それまであまり存在しなかったポストモダニズム的傾向の諸作品が呈示され、この時期の文学がいかにその前の文学と違うかが明らかにされている。さらに、純文学と大衆文学、純文学とSF小説が融合したような、この国の文学として新しい傾向の作品もみられるようになったことも説明されている。

第6章では、この時期、ロシア文学は共産党によって統制された一元的文学から脱し、ジャンルと作家層が多様化した。その例として、ソ連時代には禁忌的であった宗教文学や性文学等の出現があげられている。さらに顕著になった女性作家たちの活躍が論じられ、その代表的な作家や作品の記述がなされ、それらがロシア文学の新しい諸特徴を形作っているとされる。

第7章では、この時期のロシア文学の質的变化を如実に表していた新しい文学諸傾向の代表として、ポストモダニズム、コンセプチュアリズム、ソツアート等を取りあげ、これらの傾向の作家と作品を具体的に考察し、その実態がどうであったか、そしてそれがいかなる特徴をもっていたかが論じられている。また、ポストモダニズム等の新しい文学諸傾向には批判はあるが、それは、この時期のロシア社会のカオスの状況、そして世紀末的雰囲気にも助長された退廃的風潮を反映した文学現象であるとしている。

結章では、この時期、ロシア文学界は共産党支配から脱却して多数の優れた作品を産出し、ペレストロイカ期には活況すら呈したものの、ソ連崩壊後は全体として、西側の大衆文化や大衆小説の影響、さらに商業主義などの悪影響を受けマイナス方向に変化し、内容のみならずその社会的地盤沈下を招くなど、全般的に低迷することになったという見解が示されている。以上の考察を通して、ロシア文学がこの時期、ソビエト文学およびソ連作家同盟の消滅という外的変化だけでなく、内的変化をも経験したことが指摘されている。すなわち、社会主義リアリズム系の作品にかわり、亡命文学等の伝統的諸傾向の作品が主流になり、大衆文学が大きな位置を占め、ジャンルやテーマの多様化にともない新しい諸傾向の文学が出現し、社会における文学の役割の変化がみられたことなどが論じられている。

審査の結果の要旨

わが国では、ロシア文学は明治以降よく読まれ親しまれてきており、その当時からロシア文学は、他国の文学とはかなり趣を異にし、世界文学の中でも極めて特異な文学であるとみられていた。ロシアでは、文学は宗教や哲学、社会や政治と密接な結びつきをもち、つねに美学的機能より、理想的、そして実用的機能がはるかに強調されており、作家は人生の教師か精神的指導者として尊ばれ、高い社会的権威が付与され、迫害を蒙れば受難者の扱いも受けてきた。この国では文学は、常に、その娯楽性より、社会的意義の方がとりわけ重んじられてきたのである。それ故、この度のソ連邦解体や体制的転換が文学にいかなる影響を及ぼしたかは、非常に注目されるところであった。

わが国では従来、ソビエト文学は面白くないとされてきたが、ベレストロイカ以降、それが非常に面白くなったと評価された。だがその後、ソ連崩壊前後の全般的な混乱の中で、ロシア文学がどうなったか、その文学をとり仕切っていたソ連作家同盟がいかなる状況下にあるのかは、研究者の間ですらよくわからないというのが実状であった。本論文は、ソ連崩壊期の混乱とした状況下におけるロシア文学の現状とその変化の様相をめぐり、膨大な資料、つまり文学系定期刊物や単行本、研究書等の詳細な分析をもとに論考したものであるが、ロシア文学の変容の過程と変容の内容を解明することに大いに成功している。

この時期のロシア文学の行方は、この国の大きな変化を示す一要素として、世界的に大きな関心が持たれている。したがって論文中でも言及されているように、当然のごとく本論文の研究と同時期に、ロシア本国、日本、アメリカ、カナダ、そして中国等で類似の研究が公刊された。しかしそれらは概して、この時期に注目される作家や作品、あるいは一定の傾向等などの個別的研究にとどまることが多い。ところが本論文は、この時期のロシア文学変容過程を多面的・総合的・体系的に考察しており、そのことが大きな特徴となって、世界的に貢献する論文となっている。

しかし本論文を部分的にみた場合、この時期に発表された諸作品の分類の仕方の妥当性の問題、また当該テーマにそって代表とされた作家の選択の仕方の適切さの問題がある。さらに作品分析においても、全体的構想からいってやむをえないとはいえ、物足りなさを覚える。また、詩の分野が取り上げられていないなどの不満な点も残る。しかし、それによって、本論文の全体としての価値が損なわれるわけではなく、むしろ社会全体の大きな変化の時代におけるロシア文学の変容をめぐり、世界的にいはじめの総合的な追究がなされ、そしてその解明がなされたことは評価される。今後、次世代の研究者がこの問題の一層の解明を行うことになろうが、その際、必読の重要な文献となろう。

稀にみる国家大変動の中で、ロシアの文学がどのような状況にあったのかをめぐり、膨大な資料を基に検証し、当該年間のロシア文学の変容について可能な限り総合的・体系的に解明した意義は大きい。さらにまた、本論文は直接的には、そうした極めて特殊な状況下の極めて特殊な文学の変容を扱ってはいるものの、間接的には広く<文学>と<社会>の関係、とりわけ社会的激動期における<文学>の運命、ひいては<文化>の運命を考える際の具体的事例を呈示したと評価できる。この意味においても、本論文はロシア文学、あるいは文学研究だけでなく、文化的・社会的研究分野にも寄与するところ大であるといわねばならない。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。